

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：37118

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04096

研究課題名(和文)「メディアミックス」としての公害資料館の意味

研究課題名(英文) The Museum as Media Complex: How are stories of environmental pollution incidents told?

研究代表者

池田 理知子 (Ikeda, Richiko)

福岡女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：50276440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：公害資料館の課題は、「負の遺産」をいかに伝えるかである。資料の展示だけでなく、地域の小学校の公害学習の場でもあり、語り部や解説員といった様々なメディアを通して公害を伝える工夫がなされている。今回の研究の中心となった四日市市の「四日市公害と環境未来館」は、加えて博物館と併設されているところに特徴がある。また、9歳で亡くなった公害認定患者の少女がモデルのマンガが刊行され、資料館および市や学校の図書館で読めるため、それを読んでから資料館を訪れる生徒も少なくない。様々なメディアが複合的に組み合わせられることで、公害と戦争とのつながりなど公害の多面性を伝える可能性を今回の研究では確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

公害資料館は、地域の小学校の公害学習の場として欠かせない存在である。今回の研究では、その学習の一助となるべく公害マンガを収録した書籍を発表した。また、そのマンガを使った授業を行っている四日市と福岡の小学校教員、四日市の資料館の語り部/解説員との意見交換の場を一般公開のシンポジウムという形で行った。その成果報告書を研究代表者の本務校がある福岡市および隣接する小学校に配布した。四日市の小学校教員を通して全国の多くの教員の手に渡った。こうした取り組みを通して研究成果の社会への還元を実施してきたことの意義は少なくないはずだ。

研究成果の概要(英文)：Kogai (health hazard incidents) museums undertake to convey the meaning of Kogai as a 'negative heritage.' In order to fulfill this purpose, these museums try not only to improve the quality of their exhibitions, but to provide kataribe (story-teller) sessions and guide services. They function as a media complex, and offer a place for primary school students to study Kogai through a variety of these media. The present research focuses the Kogai museum in Yokkaichi, which shares its exhibition area with a history museum. Sora-no Aosa-ha Hitotsudake, a book which included a manga about a nine-year-old girl who died from Yokkaichi asthma, was published in 2016. Copies of the book are available in the museum, as well as in public and school libraries in Yokkaichi, so a number of students have been able to read the comic before visiting the museum. This research reconfirms the importance of taking the museum as a media complex in order to pass on recognition of the diversity of Kogai.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：メディア コミュニケーション 公害 資料館 マンガ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、今回の研究に着手するまでは、公害資料館における「語り部」や資料館そのものをメディアと捉え、そのメディアが公害を伝えるうえでどのようなメッセージを発しているのかを分析・考察する研究を行っていた。その途上で、2015年3月に四日市の公害資料館である「四日市公害と環境未来館」がオープンし、その年の9月には公害マンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」が発表されるという新しいメディアの登場に遭遇したため、四日市公害に焦点を当てる研究の必要性を感じるに至った。

(2) 新しい「メディア」の導入により既存の「メディア」が何らかの影響を受けることは、メディア発達史での研究が示す通りである。また複数のメディアからメッセージが発信されることによりこれまでとは異なる、公害を伝えるうえで「効果」が期待できるはずである。こうした点を踏まえて、公害資料館を「メディアミックス」実践の場と捉えて、今回の研究を進めることにした。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、公害資料館を「メディアミックス」実践の場と捉え、様々なメディアが何をどのように伝えているのか、それらが相互にどのような影響を与えあうのかを四日市公害の資料館である「四日市公害と環境未来館」を事例として取り上げ、検証することであった。前述のように、「公害マンガ」がつくられたことにより、資料館の展示や、「語り部」や「解説員」が伝えるメッセージにどのような変化が表れるのか、こういった相乗効果があるのかを明らかにしようとした。

(2) 本研究は、事例研究であると同時に、「負の遺産」を伝えるためのメディアのあり方を探るといふ、メディア分野での研究への貢献をその目的の一つとしている。マンガが公害をどのように表象し、オーディエンスはそこからどういうメッセージを受け取っているのかを明らかにしようとした。

3. 研究の方法

(1) 「四日市公害と環境未来館」におけるフィールドワークを継続して行った。「語り部」の講話や「解説員」の説明などの参与観察を複数回実施したり、「語り部」や「解説員」から話を聞いたりといった調査を実施した。研究期間中に展示の入れ替えなどもあり、展示内容の変化も含めた展示物が発するメッセージの検証も行った。

(2) 公害マンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」が描く公害の意味を明らかにするために、公害が描かれているマンガにどのようなものがあり、それらが公害をどのように描いているのかを調べた。京都国際マンガミュージアムや熊本学園大学水俣学現地研究センターの資料から公害を背景として描いているマンガを抽出し、それらの内容を分析した。

4. 研究成果

(1) 2015年に完成した公害マンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」が、メディアとしてより多くの人と四日市公害をつないでいけるように、研究代表者が中心となって書籍として編纂し、2016年に『空の青さはひとつだけ マンガがつなく四日市公害』と題した一冊の本となった。マンガと、研究代表者もそのなかに入るのだが、マンガに関わった人たちから寄せられた文章を本としてまとめた。この本自体も、絵と文字が複合的に組み合わせられたマンガと、文字のみの文章という2つの異なるメディアが組み合わせられたものとなった。本の刊行後、講演を複数回依頼され、このマンガが本という形で読者の手に届くことの意味について話した。微力ではあったかもしれないが、四日市やその周辺でのこのマンガの受容に貢献したのではないだろうか。三泗教育発表振興会主催の小中学生の夏休みの自由研究作品を紹介する展示会では、多数の四日市公害を扱った作品があり、参考文献に公害マンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」があげられていたことからその一端がうかがえる。そのマンガがどのように受容され、公害を伝えるうえで影響をあたえているのかについては、2017年1月7日に行われた第12回水俣病事件研究交流集会で、口頭での報告を行った。

(2) 四日市の公害資料館「四日市公害と環境未来館」には、博物館が併設されている。また、建物の構造上、博物館を通らなければ資料館には入れないようになっている。こうした展示の導線における特殊性がもたらしたものの一つが、「産業の発展とくらしの変化」と題した展示部分を博物館と公害資料館が共有していることである。つまり、そこは博物館の最後であり、公害資料館の最初の展示と位置付けられているのである。その特殊性がどういう意味をもつのかを分析して得られた結論の一つが、そこが戦争と公害のつながりを深く考えさせられる場となる可能性であった。

一般的な四日市公害の説明では、海軍燃料廠跡地に建設された石油化学コンビナート(第1コ

ンピナート)が公害を発生させたというところから話が始まるのだが、それよりも前に公害の起点を置いて考えることは重要である。公害資料館の展示では、明治に入ってまもなく稲葉三右衛門が四日市港の改修を行ったという解説が最初にある。なぜそこらなのかを考えると、公害の遠因に明治政府の「殖産興業」「富国強兵」といった国策があったこと、そして諸外国との競争が激しくなったことに行き着く。このように、より広い文脈で公害と戦争のつながりを考えていく必要があることを痛感し、「産業の発展とくらしの変化」のコーナーの展示を詳細に分析していった。そこには戦前・戦中の日常の風景を模した昭和初期のくらしと、団地の一室を模した高度経済成長期のくらしの2つの展示があり、この2つを対比することで、公害資料館が伝えなければならないメッセージが、公害と戦争のつながりであり、それが未来の環境を考えることにつながるのだということが明らかになった。

この研究成果は、2016年10月22日に熊本大学で行われた第23回日本コミュニケーション学会九州支部大会で、「対話：記憶をつないでいくということ」と題して口頭で発表した。この口頭発表をベースとして、2017年に「ミュージアムが語る戦争の記憶」を『九州コミュニケーション研究』15巻にまとめて発表した。また、2017年に出版された『記録と記憶のメディア論』のなかの1章「メディアとしてのミュージアム、その可能性 『四日市公害と環境未来館』を起点として」にも、研究を通して明らかになった点をまとめている。

(3)「四日市公害と環境未来館」の展示の「多声性」を見出しえたことも研究成果の一つといえる。公害をテーマとした公的な資料館に行くと、「公害を克服した」というメッセージが前面に押し出されている印象を受ける。「四日市公害と環境未来館」であれば、青空が戻ったことが前景化され、企業の公害防止対策が成功したことなどが強調されている。企業、市民、行政が一体となって努力したからこそ、「克服」できたのだというメッセージが発せられていることが、展示の流れをみても明らかである。しかし、公害が「終わった/終わっていない」や、公害を「克服した/克服していない」といった早急な結論を求めるような議論ではなく、多声性を軸とした「対話」の継続を志向すると、資料館の展示から異なるメッセージが聞こえてくる。

たとえば、「公害発生」コーナーに用意されている原告患者の裁判での証言音声からは、息をするのも苦しそうな様子が伝わってくる。この男性は、病気の症状が重く、法廷の場に立つことができなかつたため、録音された声での裁判参加となつたのだが、その録音テープから伝わってくるのは、呼吸ができることをいかに私たちが当たり前に思っていたかである。公害について語る際、「今、ここ」だけを考えていたのではどうにもならない。多様な他者の声に耳を澄まし応答すること、つまり「対話」を行う必要があることは確かで、公害はすでに克服されたというメッセージを発しようとする資料館は、現在の時点から過去を見つめているだけにすぎず、それだけだと「対話」の相手が限定される。資料館の展示の分析から、世界中から四日市の資料館にやってくる人たちや、これから先の世代に何を伝えていこうとしているのかを考えていかなければならないことが明らかになったといえる。

この研究成果は、2018年9月22日にJ:COM ホルトホール大分で行われた第25回日本コミュニケーション学会九州支部大会で、「『公害を克服した』という言説から考えるコミュニケーションの可能性」と題して、口頭で発表した。

(4)公害が描かれているマンガにどのようなものがあるかを調べた結果、1970年代の劇画に公害がストーリーを展開するうえでの背景として描かれているものがいくつかみつかった。たとえば、1970年から71年にかけて『週刊少年サンデー』で連載されていたジョージ秋山の「銭ゲバ」には新潟水俣病を想起させる場面がたびたび描かれている。また、1970年には、『週刊少年サンデー』で楳図かずおが「おろち」の第8話「眼」で大気汚染が発生した町での殺人事件を描いている。その他にも水俣病がストーリーに組み込まれた読み切りの作品に、1970年7月7日号の『週刊ぼくらマガジン』に掲載された横山プロ作品「黒い海」や、1973年8月20日号の『週刊少年ジャンプ』に第5回手塚賞佳作入選作として載せられている菅原勝見の「天使になれない」などがある。これらのマンガを読むと、1970年代前半を高度経済成長期のピークとし、1973年の第1次石油危機(オイルショック)でそれまで成長の一途をたどっていた日本経済に陰りが見えはじめたという時代背景が伝わってくる。1970年代前半に発表されたこうした一連の作品の内容を分析すると、次のような特徴があることがわかる。一つには、作品自体のテーマが家族愛や友情、恋愛といった別のところにあること、「公害」が主要なテーマとなっているわけではないことの2点である。ただし、少女漫画のなかには公害を前面に出した作品がある。1971年4月号増刊の少女誌『なかよし』に載った萩尾望都の読み切りマンガ「かたつぼのふるぐつ」である。作品のなかではY市となっていたが、おそらく四日市をさしており、四日市公害を取り上げている。この作品は、社会の発展のためには多少の犠牲があったとしてもしかたがない、その犠牲を最小限に抑えるためにそれぞれがリスク管理をしなければならないという「大人の論理」の欺瞞性を暴いている。

公害を描いているマンガが、1970年代に集中していることからみえてくるのは、それ以降は社会のなかで公害が忘れ去られてきたこと、すでに過去の問題だと思われることを示していると分析できる。こうした流れのなかで、公害マンガ「ソラノイト～少女をおそった灰色の空～」が2015年に描かれたことの意味は大きい。今回のマンガに関する研究の成果は、『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』のなかの1章「文化とコミュニケーション

ヨン 「メディアが伝えるリアリティ」にまとめた。

(5) 公害を伝えるための教育実践を行っている学校の取り組みを中心に検証・考察を行った。具体的には、四日市市の小学校で公害教育に取り組むある教諭の授業実践の分析と、福岡県太宰府市の小学校で公害マンガを使って四日市公害を学ぶ授業実践の事例の分析である。資料館という場がない状況でのマンガを使った公害学習の事例では、社会科の授業であるにもかかわらず、まるで国語の読解の授業のようになってしまったという担当教諭の言葉からわかったのは、より重層的な学びを引き出す役割を資料館が担っているということだった。また、前述の二人の小学校教諭と資料館の語り部/解説員を交えての意見交換の場をシンポジウムという形で行い、そのシンポジウムの成果を報告書「次世代に記憶をつなぐ 地域のミュージアムを生かした教育」としてまとめた。シンポジウムの報告書には、以下の内容が収録されている。「四日市公害と環境未来館」で語り部および解説員をしている伊藤三男の講演「四日市公害を伝える資料館の役割」と、四日市市の小学校で公害教育に取り組む早川寛司の授業実践の報告を研究代表者がまとめた「マンガ『ソラノイト』で学ぶ四日市公害」、福岡県太宰府市の小学校で公害マンガを使って四日市公害を学ぶ授業をしている伊崎優太郎の実践報告「太宰府市の小学校での四日市公害授業実践」、研究代表者の司会のもとに前述の3人に参加してもらったパネルディスカッションの報告「パネルディスカッション」、来場者へのアンケートからの抜粋である「来場者アンケートから」、シンポジウムと同時開催した写真展の報告「四日市公害写真展」。公害教育の現場において、公害資料館と公害マンガという二つのメディアがどのような相乗効果を発揮しているのかが模擬授業や実践報告を通してわかるような内容・構成になっている。公害資料館を「メディアミックス」の場として捉え、公害を伝える可能性が具体的にどこにあるのかを研究する本課題の集大成となった。また、『グローバル社会における異文化コミュニケーション 身近な異から考える』のなかの「他者との出会い 『異なる』という意味」と「コミュニケーションの 想像/創造する力 記憶の継承」でも、研究成果の報告がなされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 池田理知子 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 ミュージアムが語る戦争の記憶 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 九州コミュニケーション研究 | 6. 最初と最後の頁 21-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 池田理知子 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 コミュニケーションのプロセスを可視化する傍流の語り | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 九州コミュニケーション研究 | 6. 最初と最後の頁 80～87 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 池田理知子 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 『暮しの手帖』にみる公害の記録 1967年91号の特集『この大きな公害』から読み解く | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 九州コミュニケーション研究 | 6. 最初と最後の頁 3～17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件／うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 「公害を克服した」という言説から考えるコミュニケーションの可能性 |
| 3. 学会等名 日本コミュニケーション学会九州支部大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 「病」の定義 水俣病から考えるヘルスコミュニケーション |
| 3. 学会等名 第47回日本コミュニケーション学会年次大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 現地に学び、現地にかえすこと |
| 3. 学会等名 第47回日本コミュニケーション学会年次大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 病の表象 資料館における「公害病」 |
| 3. 学会等名 第9回日本ヘルスコミュニケーション学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 語る権利 四日市再生「公害市民塾」の取り組みから考える |
| 3. 学会等名 日本コミュニケーション学会九州支部第24回年次大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 『空の青さはひとつだけ マンガがつなぐ四日市公害』刊行記念トーク |
| 3. 学会等名 四日市再生「公害市民塾」(招待講演) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 「イト」にたくして 若い世代が語れる公害問題 『空の青さはひとつだけ マンガがつなぐ四日市公害』重版記念トーク |
| 3. 学会等名 丸善ゼミナール(招待講演) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 対話：記憶をつないでいくということ |
| 3. 学会等名 日本コミュニケーション学会九州支部第23回大会(招待講演) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 池田理知子 |
| 2. 発表標題 四日市公害マンガの受容について |
| 3. 学会等名 第12回水俣病事件研究交流集会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計6件

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 池田理知子、埴幸枝 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 三修社 | 5. 総ページ数 176 |
| 3. 書名 グローバル社会における異文化コミュニケーション | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 谷島貴太、松本健太郎 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 234 |
| 3. 書名 記録と記憶のメディア論 | |

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 池田理知子ほか | 4. 発行年 2016年 |
| 2. 出版社 くんぷる | 5. 総ページ数 157 |
| 3. 書名 空の青さはひとつだけ マンガがつなぐ四日市公害 | |

| | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 池田理知子ほか | 4. 発行年 2016年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 179 |
| 3. 書名 よくわかるヘルスコミュニケーション | |

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 青沼智、池田理知子、平野順也 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 181 |
| 3. 書名 メディア・レトリック論 | |

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 池田理知子 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 福岡女学院大学 | 5. 総ページ数 77 |
| 3. 書名 次世代に記憶をつなぐ 地域のミュージアムを生かした教育 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|